

〈書評〉

須永隆著

『プロテスタント亡命難民の経済史 近世イングランドと外国人移民』

(昭和堂、2010年)

水野 明日香*

Tkashi Sunaga

An Economic History of Protestant Refugees in Early Modern England

Asuka Mizuno

イギリスは15世紀を境にして、伝統的な羊毛輸出国から毛織物輸出国へと変貌を遂げた。イギリスの毛織物工業は、封建的なギルド規制の外で自由に展開された農村部の小商品生産者によって担われ、これが英国資本主義発展の基本的な起動力となったことはよく知られており¹⁾、この発展過程の解明は経済史の重要な課題である。本書はこの課題に正面から挑んだ書であり、研究史的にはイングランド史の泰斗ジョン・サースクによる「イングランドの工業、農業の発展に対する外国の影響」、およびマーガレット・スパッフオド「16、17世紀における宗教の重要性」という指摘を継承している（本書のはじめにより）。本書の全体を貫く大きな主張は次の二つである。一つは、16～17世紀に大陸からイングランドに移住したプロテスタントの宗教難民が、新しい製造業の技術と近代資本主義を生み出す際に必要であった規律化された合理的な精神をもたらしたというものである。二つ目は、イングランド政府は移民の受け入れは国内産業にとっては打撃であったにもかかわらず、新しい技術の導入という経済上の理由から難民を積極的に受け入れたことである。

本書は移民の職業、イングランドの移民政策、移民社会の中心となった教会の役割という三つの視点を軸に、16世紀から17世紀までを対象時期として扱っている。本書の構成は以下である。

第1章 ヨーロッパの宗教戦争とイングランドへのプロテスタント亡命難民

第2章 16世紀後半のイングランド経済と技術移転

第3章 ロンドンにおける亡命者社会の形成と移民政策の展開

第4章 イングランドにおけるカルヴィニズムの受容と規律の形成

第5章 ロンドン・フランス人教会とピューリタニズム

第6章 地方都市コルチェスターにおける亡命者の定住と移民政策の特徴

* 亜細亜大学経済学部講師

¹⁾ 関口尚志・梅津順一『欧米経済史』放送大学教育振興会1995年、28ページ、楠井敏郎・馬場哲他『エレメンタル西洋経済史』1995年、44ページ。

第7章 ロンドンにおけるユグノーの定住とその職業構成についての考察

第8章 名誉革命後の移民受け入れの論理と拒絶の論理

第9章 「ナントの王令」廃止前後のフランス人教会と難民救済

終章 近世イングランド経済と亡命者

第1章では本書全体の歴史的背景として、ヨーロッパ大陸部で宗教難民が発生し、これをイングランドが受け入れた事情が概説されている。本書によれば、16世紀から17世紀にカトリックとプロテスタントの対立から起こった宗教戦争を背景として、宗教難民は大きく二回発生した。一回目は16世紀後半であり、この時は約10万人が大陸から脱出した。二回目は1685年の「ナントの王令」廃止をきっかけとするフランス人プロテスタント「ユグノー」のディアスポラであり、1680年以降の20年間で20万人が海外に脱出した。ユグノーの多くは、都市の職布工、染色工、貴金属製造工など中産層に属する熟練職人からなっていた。こうした難民を「イングランド国教会」という特有のプロテスタント国家を標榜したイングランドは、単なる人道上の理由からだけではなく、「イングランドは大陸と比較して産業的に遅れている」という事情から、国内の産業には大変な打撃であったにもかかわらず、難民を積極的に受け入れた。

第2章では、16世紀後半にイングランド東南部の各都市、サウサンプトン、ノリッジ、コルチェスター、メイドストーン、カンタベリーなどに移住した移民の職業構成、職業従事者数が整理されている。ここで明らかにされていることは、亡命者の多くがベイ織 (Bay)、セイ織 (Say) に代表される新毛織物 (New Draperies) 製造に従事する手工業者であったことである。本書によれば、移民の職業は在来のイングランド毛織物業者とは競合・対抗関係にあり、摩擦も生じたが、受け入れた上述の諸都市は16世紀前半から目立った経済的衰退をみており、亡命者の技術によって復興を図ったのであった。実際、外国人の定住を端緒に経済的復興を遂げ、毛織物は増産した。

続く第3章では、第2章で明らかにされた亡命者の地方都市への拡散と居留地の形成を支援したロンドン亡命者社会を中心に、移民がもたらした新技術、新産業、在地の諸カンパニーとの関係について、プロテスタントに対して異なる政策を持っていたテューダー朝からスチュアート朝の諸王の治世 (1540年から1649年) の期間が考察されている。本書によれば、プロテスタントに親和性を持ったエドワード6世が即位すると亡命が促進され、多くの移民、新技術、新職種がもたらされた。例えば、桶職人 (coopers) は14世紀末にフラマン人が導入したビール醸造業と関連し、外国人が確立した職種であり、印刷業 (printing traders) もイングランドでは外国人に依存した全くの新職種であった。エドワード6世下では70人の外国人が印刷業で働いており、その大部分はオランダ人雇職人 (journeymen) であった。ロンドン織布工カンパニーのような代表的カンパニーも早い時期から亡命者の織布工に一目置き、彼らの技術を積極的に導入しようとした。彼らの技術はロンドンの商工業者にとっても不可欠となっていたため、メアリー1世のカトリック的反動政策の中でも、従来の通説に反して宗教移民の相当部分がロンドンに留まった。続くエリザベス1世の治

世には、亡命者の技術を利用しようとする意識が急速に再び盛り上がり、ロンドンの外国人移民社会は転換を遂げた。この立役者は当時もっとも名高い開明的な政治家ウィリアム・セシルであり、彼は製品の輸入を減少させるために、二つの政策を導入した。その一つが、新技術を有する外国人に一定期間のпатентを付与する政策であり、もう一つは東南部各都市に向けてのプロテスタント亡命者招致政策であった。この時期には亡命者の職種にも変化が見られた。大陸の宗教戦争の激化に伴い低地地方の織物工業都市での迫害が強化されると、大衆向けの新毛織物の織布工が多く流入し、この新しい亡命者が東南部各都市における毛織物工業をウールンからウーステッドへの転換を生じさせる礎となった。その際、ロンドンの亡命者教会は地方都市に職人を送るための選抜機能を果たしただけでなく、ロンドンの外国人社会の経済的規制にも利用された。当時、外国人が経済活動を行うためには国籍取得者となる必要があったが、1562年以降、新規の国籍取得者の登録は牧師の審査を経て行われるようになった。ただし、実際には国籍を取得し、上述したように諸カンパニーとの関係を維持した外国人は、全体から見ると少数であり、彼らの多くは2~3名のサーバントを使用する個別の手工業者であった。また諸カンパニーは、自己の利益のために彼らの技術を利用できる場合にはほとんど利用したが、通常では外国人職人の経済活動を絶えず牽制して自由な経営活動を禁止しようとした。特に不況期には外国人が使用する織機や機械に対する敵意や破壊運動が見られた。

その後、ジェームズ1世の治世には亡命者は受難の時を迎えた。宗教的にはピューリタンはイギリス国教会に対して教会改革を主張するようになり、経済的にはこの時期には深刻な不況が到来し、外国人職人への反感が強まった。しかしその後、外国人は公然とピューリタンの側に立ち、続くクロムウェル政権ではその保護に服するようになっていった。

4章と5章では、亡命者がもたらした技術から宗教的な規律化の問題に視点が移される。ここでは亡命者教会がイングランド宗教改革運動に果たした役割、特にカルヴィニズムの教会規律や訓練の実態が明らかにされている。教会の「規律」には道徳的な含みがあり、賭事、酩酊、乱闘などと並び金銭問題、契約問題などの罪を犯した教会員に対して、教会を運営する長老会により処分が下された。規律化された人間は神以外の存在に価値を置かず、専制君主や封建領主の恣意や圧政にもひるまない性格をもつヨーマン、商人、富裕な職人など勃興しつつある中産階級であった。5章では、亡命者教会の長老会議事録を利用して、教会員の具体的な職業、喧嘩、酩酊など「規律」ごとに問題とされた行為の個別事例とそれに対する陪餐の参加禁止など長老の判断が明らかにされている。本書によれば、厳しく規律化された彼らは誇り高き職人であり、その宗教的信念に基づく真面目さ (sobriety) や勤勉さ (industriousness) をイングランド政府はイングランド人の手本になると考えていた。

第6章では、イングランド東南部の地方都市であり、亡命者の技術が移転した代表的都市であるコルチェスターにおける移民の詳細な活動、地元の織物業者との軋轢が明らかにされている。亡命者のコルチェスターへの移住はエリザベス期の1560年代に始まり、当地ではレッドロー

(Readrowe) と呼ばれる場所が「オランダ人ベイ・ホール」(Dutch Bay Hall) として提供され、亡命者はそこで年使用料を支払いながら経済活動を行った。このホールでは、コルチェスターで製造された全てのベイ織の品質を検査し、合格したものだけに「合格検印」(leaden seal) を押すほど、亡命者は商品に対する信頼に気がついた。1577年にはコルチェスター西北に位置するハルステッドにも市の当局から移住許可が下りたが、品質管理の違いが在来の織物業者との間に軋轢を生み、この地への移住は進まず、1590年には移民は再びコルチェスターに戻った。本書によれば、1591年以降になると亡命者と在地の織元との軋轢はさらに強まったが、コルチェスターからのベイ織の輸出量の伸びは1610年代後半から1620年代後半に絶頂期を迎えた。しかしながら皮肉にも絶頂であった同時期に、政府による亡命者に対する厚遇政策は、財政の行き詰まり、イングランド全体の不況を背景として転換した。1630年代に入ると亡命者の経済活動に関する規制は強化され、亡命者の活動は次第に狭められていった。

第7章では、17世紀後半以降の時代の亡命者の中心であるユグノーに分析の焦点が移される。本書によれば、近代資本主義の揺籃期を担ったカルヴィニストの一派であるユグノーは、1685年のナントの王令廃止を契機として亡命を余儀なくされた者たちであり、彼らの経済活動は、ギルドなどロンドンの経済的諸規制を突き崩し、個人主義に基礎を置く合理的な生活態度によって「フリー・トレード」を解き放った重要な推進力に挙げられる。この章ではロンドン最大のフランス人教会であるスレッドニードル・ストリート・チャーチに援助を求めたユグノーの史料から彼らの職業活動と構成の分析が行われている。ユグノーの代表的な職業は、絹、紙、帽子、ガラスの製造業であり、特にロンドン東部のスピタルフィールズでは一世紀前のネーデルランド難民の場合と比較して大量の亡命者が単一の産業に従事していた。著者はこれを彼らが「信仰の亡命者」であったことを考慮に入れないと理解できないとする。

第8章では、同じく17世紀後半の名誉革命前後のイングランドの移民政策が扱われている。それまで以前の時期と同様に、この時期にも、宗教上の理由とは別に経済政策的な理由からイングランドではユグノー移民の招致を行った。ただし移民招致の理由はそれまでの新技術の導入のためだけではなく、人口増加こそがイングランドの経済発展の要であると人口に着目したものに变化した。しかし政策とは裏腹に、地元住人や既存のギルドは移民受け入れに反対した。こうした外国人受け入れをめぐる政治的対立の基本構造は、政治的には商工業の利益を優先し、外国人帰化を奨励するホイッグ対イングランドの伝統的価値意識を重視し、帰化法案を阻止しようとするトーリーの討論として現れるものであった。

第9章では、ロンドン・フランス人教会のユグノーの大量移民に対する対処、義捐金の募集、移民生活の支援、職業斡旋が具体的に分析され、移民の定住にはそれまでの時代と同様に教会が重要な役割を果たしていたことが明らかにされている。

本書の重要な意義は、冒頭に記したように、イギリス毛織物工業が発展する重要な契機となった

「外国の影響」、すなわち移民が新しい技術、生産管理の方法をもたらしたことを史料的に裏付け、実証したことである。アジア経済史を専攻する評者にとって興味深いのは、外国の人、技術を取り入れるイギリスの巧みさと豊かさである。時代は下るが、イギリスはアジアから茶、綿製品を輸入し、輸入代替を行い、大衆消費財として世界に輸出した。こうしたことを可能としたのは、イギリスの「豊かさ」、すなわち不要不急の外国製品を輸入する余力と国内市場の存在であったと評者は考える。それではイギリスの「豊かさ」の源泉はどこにあったのだろうか。

また本書の主要な論点からは若干それるが、イギリスでも絹織物の製造技術が移民によってもたらされたことも評者にとって興味深かった。ミャンマーでも絹織物の製造は東北部の山岳民族であるシャン族かインドとの国境近くのヤカイン州の一部の民族固有の技術である。現在「タイシルク」で有名なタイでも、絹織物の製造はもっぱら辺境のクメール系、ラーオ系の民族が従事する職業であり、前近代のミャンマー、タイでは絹の製造技術は平野部の民族には移転しなかった²⁾。特定の技術に関して、世界的に同様の傾向がみられるとすれば、それはいかなる理由なのだろうか。

本書には以上で取り上げきれなかった他の論点が多く含まれている。また随所で挙げられている移民の職業構成表などは、訳語を考えるだけでも大変な作業であり、本書は著者の地道な作業のたまものである。以上には専門外の評者の誤解も当然あると考えられるが、これについては著者のご容赦を願いたい。

²⁾ タイの絹織物業については、小泉順子「メイド・イン・タイランド—「タイシルク」の来歴に関するノート—」『歴史叙述とナショナリズム タイ近代史批判序説』東京大学出版会、2006年、第7章を参照。